

特集

撮影を通じた 出会い

世界の高校生の撮影交流プログラム
「Focus on Japan 2007」の9日間

過去10回にわたって実施してきた「高校生のフォトメッセージコンテスト」を2006年度に終了し、その総決算として、2007年8月に、写真撮影を通じて世界の高校生の交流を図ることをめざした記念事業「Focus on Japan 2007」を実施しました。

海外から招いた高校生8人と日本の高校生8人が、4人ずつチームを組んで日本の4都府県を訪問して撮影を行い、人びとの姿や暮らしを写真と文章で紹介する作品を共同で制作しました。作品はウェブサイトなどで世界に発信しています。

今号では、各チームの作品とともに、参加した高校生が訪問先の人や高校生との交流を通じて、何を感じ、学び、考えたかをご紹介します。

Focus on Japan
2007



Hiroshima



Osaka



Tokyo



特集 p.1

撮影を通じた出会い

世界の高校生の撮影交流プログラム「Focus on Japan 2007」の9日間
「高校生のフォトメッセージコンテスト」から「Focus on Japan 2007」へ

作品1：一期三会

作品2：東京に生きる——大きな街、小さな物語

作品3：暑い、熱い、ATSUI 大阪!! 知らないと“Mottainai” Wonder

作品4：Finding the Richness 豊かさの発見

課題とこれからの展望

シリーズ p.10

見る聞く考えるやってみる授業 ⑤7

「生き方教育」としての「国際理解教育」の実践

TJFニュース p.12

友好都市間の教育交流のお手伝い

民話を通じて隣国のことばと文化について考える ほか

お知らせ p.16

「高校生のフォトメッセージ コンテスト」から 「Focus on Japan 2007」へ



「Focus on Japan 2007」に参加した16人の高校生。

1997年から2006年まで開催した「高校生のフォトメッセージコンテスト」では、日本の高校生の素顔や日々の様子を、高校生自身が写した写真と文章で、国内外の同世代に向けて発信しました。その過程で、写真は撮影者と撮影されるものの相互理解を深め、人と人とをつなぐ有効な媒体であると認識し、この写真の特性を生かして、世界の高校生の交流の場をつくりたいと考えました。

そして、2007年8月3日から9日間にわたって、「Focus on Japan 2007」を実施しました。日本の高校生を含む世界の高校生16人が、4グループに分かれ、宮城、東京、大阪、広島の4都府県を訪問し、現地の人びとの姿や暮らしを写真と文章で表現する作品を制作しました。作品をつくる過程で、ことばや文化の違いを超えて対話と交流を深めるとともに、多様な地域と人びとの姿を、高校生の視点で国内外の同世代に発信してもらおうとしました。

参加者が決まるまで

実施にあたり、「高校生のフォトメッセージコンテスト」の趣旨を理解し、毎回コンテストに力作を寄せてくれた高校の写真部の顧問に依頼し、それぞれの地域での撮影に協力してもらいました。まず参加者を募集する際の資料として、



ウェブサイトの「撮影地紹介」コーナー。

それぞれの地域を紹介する写真の撮影を依頼し、応募者はこの写真を見て、各人が訪れた場所を選びました。また、各地域の撮影候補地や、スケジュール案の作成、宿泊や食事の場所などについても顧問に事前に相談し、助言してもらいました。参加者の募集はウエ

ブサイト上で行い、応募者には三つの課題を課しました。一つは、4地域のうち、ウェブサイト上の4ヵ所の写真と資料を見て、自分が訪れたいところを決めてもらい、その地域のどこで、どんな人に会い、何をテーマにするか、どんなことを伝えたいか、また制作した作品を自分の地域の人びとにどうやって伝えるのかという課題。二つめは、自分と自分の街の紹介、三つめは、TJFが開設しているウェブサイト「The Way We Are」あるいは「であいフォトエッセイカフェ」に掲載してあるフォトエッセイ作品について感想文を提出してもらうことでした。

2007年2月の締め切りまでに、日本を含む世界の13ヵ国148人の高校生から参加申し込みがあり、選考の結果、7ヵ国16人の参加者が決まりました。

参加者には、ウェブサイト到自己紹介を掲載したり、Eメールで作品づくりのアイデアを出し合ってもらうなど、参加者が事前にお互いのことを知り、意見を交換する機会をつくりました。

4チームに分かれて作品づくり

4チームが訪問した4地域には、各高校写真部の顧問とOBが同行し、現地で加わった写真部員とともに、撮影場所を案内したり、デジタル一眼レフカメラの使い方を指導したり、作品制作に助言するなど、高校生の活動を支援しました。

参加者はそれぞれの訪問先で、どんなところを訪れ何を撮影したいのか希望を出し合い、おおよそのプランを決めて一人一台のデジタル一眼レフカメラをもって街に出ました。そして、毎日一人100枚から400枚の写真撮影しました。何千枚にも上る写真の中からみんなで25枚程度を選び、キャプションを書き、自分たちの伝えたいことをメッセージにまとめていきました。「なぜこの写真を撮影したのか」「この写真で自分たちの考えが伝わるのか」、それぞれが主張し、考えをおつけ合いながらも、一人ひとりの意見を積み重ねて、最終作品にまとめていきました。

【Focus on Japan 2007】

■時期:	2007年8月3日(金)～11日(土)
■日程:	8月3日(金) 東京集合 8月4日(土) 顔合わせ、オリエンテーション、歓迎会 8月5日(日)～9日(木) 現地での撮影、作品制作 8月10日(金) 作品発表会、歓送会 8月11日(土) 解散
■参加者:	日本の高校生8人、海外の高校生8人(中国・韓国各2人、米国・オーストラリア・ニュージーランド・英国各1人)
■撮影場所:	宮城県(塩釜市中心部、桂島、野々島など)、東京都(渋谷、代々木公園、原宿、根津、谷中、秋葉原、西新宿など)、大阪府(住吉大社、天下茶屋、新世界、大阪城、アメリカ村、道頓堀など)、広島県(広島城、平和記念公園、庄原市中心部、備北丘陵公園、尾道市商店街、千光寺など)
■主催:	TJF
■後援:	外務省、文部科学省、全国都道府県教育委員会連合会、全日本写真連盟、(社)日本ユネスコ協会連盟、朝日新聞社、(社)全国高等学校文化連盟
■協賛:	(株)講談社、凸版印刷(株)、ニコンカメラ販売(株)、(株)情報センター出版局
■助成:	独立行政法人日本万国博覧会記念機構、独立行政法人国際交流基金
■協力:	宮城県塩釜高等学校写真部、和光高等学校写真部(東京)、大阪市立工芸高等学校撮影研究部、広島県立庄原格致高等学校写真部



完成した作品は、昨年8月10日に東京で発表しました(p.4～p.7)に4チームの作品から一部を掲載しています。限られた日数で仕上げたにもかかわらず、四つの地域の土地柄や、人びとの自然な表情や日々の暮らしの様子が生き生きと表現されました。



(上)スクリーンの前で作品発表。(下)展示作品を見る来場者。

また、参加者たちがさまざまな人との出会いや人びとの親切に感動し、自分たちの目を通じて日本の姿を発見し、異なる文化と言語をもっているメンバーが意見を交換しつつ共同で作品づくりをする過程で、多くのことを得たことが明らかになりました。

高校生が得たこと

まず、参加者は写真を撮ることを通じて多くの出会いを得ていました。初めて訪れた場所で、初めて出会う人、しかもお年寄りから子どもまでさまざまな年代の人に声をかけることは、参加者にとっては大きなチャレンジでした。海外の高校生にとっては、日本語で話しかけなくてはいけないため、なおさらのことでした。しかし、勇気を出して「写真を撮らせてください」と声をかけると、多くの方が快く応じ、ときには励ましのことばをかけてくれたり、自分たちの仕事のことを説明してくれたりしました。

次に、観光では触れることのできない、土地に暮らす人び

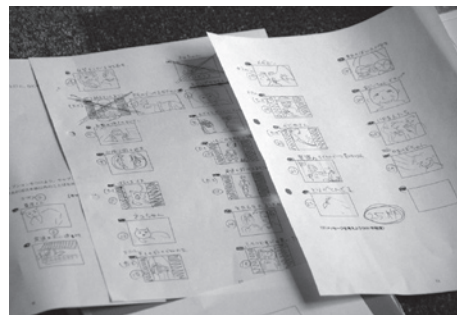
との素顔と接したことにより、日本の新たな一面を知ることができました。これは海外の高校生だけでなく、日本の高校生にもいえることでした。自分が暮らす街とは違う街をカメラのファインダー越しに見ることで、日本について考えたり関心をもったり、また海外の高校生が日本のことをもっと知ろうと積極的に活動している様子に刺激を受けて、日本を再発見したりしたようです。

また、ことばも文化も育ってきた環境も異なる4人が、同じ場所で撮影し、作品を仕上げる過程で、一人ひとりの考えやものの見方の違いが明らかになっていきました。同じ場所で撮影していても、何を感じて何を写すかは一人ひとり異なります。そして、違いがあるからこそ、ほかのメンバーの写真を見る楽しみがあると同時に、自分自身の視点をもつことが大切だということを学んでいきました。その一方で、一緒にプリクラを撮って盛り上がりたり、恋の話をしたりと、ことばや文化が異なっても、関心のあることや共感することは変わらないということも参加者は感じていました。

さらに、何千枚もの写真のなかから25枚程度を選び、それぞれの写真にキャプションをつけて、自分たちが伝えたいことをメッセージにしてまとめるという過程では、メンバー一人ひとりが、自分の考えを他のメンバーに伝えることが不可欠でした。主張すると同時に、意見を調整し、力を出し合って作品を仕上げた後には充実感があり、自信をもった高校生が少なくありませんでした。



一緒に写したプリクラ。



発表会に向けてキャプションをまとめたメモ。

作品1:

一期三会

宮城チーム …… キョンジュ (韓国・ソウル) / ボラム (韓国・ソウル) /
ありす (東京) / さお (広島)



[左から、ボラム、さお、キョンジュ、ありす]



塩釜で生まれ育って神楽の練習をする少女が、休憩の時に見せたあどけない表情です。

魚市場で早朝からマグロなどを売っているおばあちゃん。出会ってすぐに、プライベートなことを話してくれて、前から知っている人のような様子でした。



今回宮城を訪れたことで、「であい」の良さが分かりました。島の人たちは島全体が大家族みたいで、島の外から来た人たちにも優しく、「人と人が出会うことはとても大切で、ありがたいことだ」と心の温かさを感じました。また、人を見かけや育った環境で判断しがちだったのですが、考え直すいい機会になりました。

私たちは日本人と韓国人のチームで、お互いに先入観を持っていました。作品づくりなどを通じて、お互いの国の価値観や考え方について、意見を交換し、理解を深めました。宮城での活動を通じ、相手の気持ちを考えることが大切だと感じました。



島の老人クラブの会長さん。孫のキラちゃんの話になると顔をくちやくちやにして笑っていて、ほほえましかったです。

島と島、人と人をつないでくれている郵便配達員のおじさんです。夕日の中で明るく笑っていました。



宮城チームに同行して

出会ってすぐに仲良くなり、3日目にはお互いの国や人のことをよく思っていなかったことまで話し合えるまでになった4人ですが、参加する前は親密な関係を築けるとは思っていなかったようです。そんな4人が選んだテーマは「人と人との出会い」。塩釜の人たちと出会った喜び、人との出会いで感じた豊かな心や優しさにじみでるような、気持ちのいい作品になりました。もう少しこの地域ならではの生活を写したり、メッセージや写真に込めた想いを煮詰めることができれば、もっと良くなったのではないかと反省する点もありますが、短期間でここまで仕上げることができ、4人も本当によく頑張ったと思います。

[森亮介、TJF]

話し合い、ぶつかり合いながら築いた固いきずな

宮城県塩釜市は製塩によって栄えた長い歴史を持つ港町。宮城チームは、塩釜市中心部と日本三景の一つ松島で知られる浦戸諸島の桂島と野々島で撮影しました。「東北だから涼しそうでいいね」とほかのチームから羨ましがられていたものの、連日30度を超える炎天下での撮影となりました。

さおとありすは写真部員なので、初日からきばきと撮影やインタビューを行っていましたが、ボラム、キョンジュはすべて初めての経験なので右往左往していました。しかし、初めて会う人と日本語でどう話したらよいのか、どうやって写真を撮ったらよいのか毎晩話し合い、

徐々に自信をつけていきました。また、互いの国のことや考え方の違い、恋愛や夢についても夜更けまで話し合うなど、寝る間も惜しいという様子でした。

作品づくりでは、かまぼこ屋のご夫婦を撮った2枚の写真から、どちらを選ぶかでキョンジュとほかの3人が対立した時、自分の主張を曲げずに妥協しないキョンジュの意志の強さにほかの3人は驚き、キョンジュは対立していても素直に自分の意見を聞いてくれる姿勢に驚くといった場面がありました。結局、キョンジュの意見は通りませんでした。互いを尊重しあい、後腐れなく接することができることとわかり、より強い信頼関係を築くことができたようです。



作品2:

東京に生きる ——大きな街、小さな物語

東京チーム …… シアオユアン (中国・内蒙古自治区) / シアチュン (中国・上海) / みどりんぐ (大阪) / やびちゃん (沖縄)



[左から、シアチュン、みどりんぐ、シアオユアン、やびちゃん]



西新宿の裏通り。学校があった場所にビルができ、「通学路」が「通路」になってしまいました。



忙しい! 忙しい!
でも、ねむ〜い
zzzzz……。

東京は大きな街だけど、一人ひとりには毎日悩んだり、楽しんだり、その人なりの生活があります。わたしたちは、その一人ひとりのいきいきとした物語を伝えたいと思いました。東京は、昔から住んでいる自営業のおじいちゃんや、おばあちゃん、最近上京したサラリーマン、夢を追いかけている人など、いろんな人が行き交う街です。高層ビルがたくさんある新宿とは対照的に、自然があって昔ながらの家や店が立ち並ぶ静かな下町があったりします。東京には、わたしたちの想像と同じ部分と違う部分がありました。

山形から観光で来たレドガール! 原宿には個性的なファッションの若者が集まります。



そば屋を長年続けてきたおじいちゃん。いろんな年代の人と関わることが楽しいと言っていました。



東京チームに同行して

発表会の日には涙ながらに活動を振り返り、強い結束力を見せた東京チーム。でも、最初からチームワーク抜群だったわけではありません。日本語を勉強し、日本に興味はあるが写真の経験がほとんどない中国の二人は、「せっかく東京に来てのに一日中撮影ばかり。東京の街をもっと見たい!」。写真部で活躍中の日本の二人は、「もっと写真を撮りたいし、夜も遅くまで作業したい!」。お互いのペースや目的がかみ合っていない。でも、夜ホテルの部屋で思っていることを話したりしながら、お互いに少しずつ歩み寄っていきました。後半の写真選びでは、自分がいいと思う写真について、積極的に意見を主張し合いました。自分の主張が通らなくて時には腹をたてたりしながらも、めげずに本音をぶつけ合うことで、4人の距離がどんどん縮まっていきました。 [室中直美、TJF]

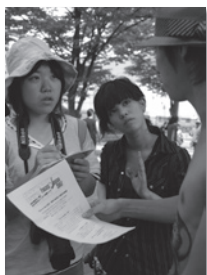
要(イヤオ/いる)! 不要(プーヤオ/いらない)!

撮影先は、若者の街の渋谷・代々木公園周辺・原宿、下町の根津・谷中、オタク文化の発信地である秋葉原、サラリーマンの街である西新宿を選びました。

「東京に生きる」人たちを表現するために、撮影のときには、その人がどんな仕事をしているのか、どんな夢をもって東京に出てきた(住んでいる)のか、東京はその人にとってどんな街なのか、などを聞きました。東京の人は冷たいのではという心配もあったようですが、明るく真摯な態度で接する日中の高校生たちに、みなさん心を開いて親切に答えてくれました。

酷暑のなかで一日中活動するので、日本に初めてやってきた中国の二人は疲れやとまどいも感じたようですが、そんな二人を日本の二人はいつも気遣い、歩み寄ろうとしていました。中国の二人も、日を追うごとにどんどん積極的になり、写真もたくさん撮るようになっていきました。

後半の写真選びでは、写真を一枚一枚チェックしながら、全員が中国語で、「要(イヤオ/いる)!」「不要(プーヤオ/いらない)!」と叫び、意見が合わないときには、「自分はなぜこの写真が必要だと思うのか」「東京チームのメッセージが伝えられるのはどの写真か」、熱く意見を闘わせました。



作品3:

暑い、熱い、ATSUI 大阪!! 知らないと “Mottainai” Wonder

大阪チーム …… ポリー (英国・ウィンズロー) / ポール (米国・ネブラスカ) / しんじ (岐阜) / ひろみ (東京)



[左から、ポリー、しんじ、ポール、ひろみ]



神社で、みんなが涼しくなるために打ち水をしていると聞きました。この写真に日本人の思いやりを感じます。



法善寺で会ったお兄ちゃんは、道におちていた鼻メガネをかけてクールなポーズでキメてくれました。

自転車屋のおじさんがポーズを取ってくれたのを見て、おばさんはつっこみをしました! おもしろかった。



住吉大社のシンボル、太鼓橋。ぼくたちが近づいても逃げなかった鴨からも愛されている橋だと思いました。



大阪は一見都会っぽい感じもするけれど、高層ビルの中にポツンと神社があったり、撮影しようと接近しても逃げないくらい鴨が人に慣れていたり、自然や生き物、古いものと現代がうまく調和していました。若者も見た目は恐そうだったり、派手だったりするけれど、たこ焼きをおやつに食べていたり、写真撮影にも快く応じてくれました。人が好きで、人とのつながりを大切にする“大阪の文化”をしっかりと受け継いでいるのだと、私たちをととても温かい気分になってくれました。“大阪の文化”がしっかり地域に根づいているからこそ、元気で幸せそうなお年寄りや、大阪の豪快な“おっちゃん”“おばちゃん”の個性が生きているのだと思います。

私たちがこんなに良い写真を楽しく撮れたことも、大阪の皆さんのノリの良さ、温かさのお陰だと感じています。大阪に撮影に行ったら本当に良かったです。

大阪チームと同行して

クールだけど熱いポール、明るさと積極性でチームを引っ張ったひろみ、繊細でみんなに気配りするポリー、違う角度で物事を切り取るしんじ。違うタイプの4人がチームになったことで、一人では決してできなかった経験ができ、おもしろい作品ができたと思います。

体力的にも精神的にも投げ出したくなることもあったと思いますが、最後まで取り組んでくれました。そんなみんなを尊敬するとともに、心から感謝します。 [原島陽子、TJF]

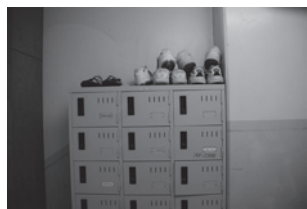
話し合い、 ときどき「へえ〜」、 のち達成感!

作品25枚のうち高校の写真が3枚というのは多すぎる、ということで、体操部、テニス、下駄箱の3枚を2枚に絞ることになったときのこと。体操部の写真は訪問した清風高校のシンボルとして問題なく残すことになりましたが、テニスと下駄箱のどちらを選ぶかなかなか決まりませんでした。テニスの写真は「このフォームは完璧。高いボールに届こうとする様子が何かを達成しようとする情熱を表現している」と自分もテニスをするポールが一押しでした。

一方、体育館にある下駄箱の写真は、写真を撮ったしんじ自身も、

ひろみも「当たり前風景で、別におもしろくない」。でも、ポリーは「本当に靴を脱ぐんだ」「夏休みにクラブ活動をするなんてすごい」と新鮮に感じたから残したいという意見。また、下駄箱の上に置いてある靴についても、日本の二人が「ただ面倒くさくて上に載せただけでは?」と考えたのに対し、ポリーの解釈は「きっと早く部活に行きたくて片づける時間も惜しかったんだ」というもので、ひろみやしんじは、そんな感じ方の違いをおもしろく感じたようでした。

最終的には、ポールが譲り、ポリーは少し申し訳なさそうでしたが、下駄箱の写真が作品に入ることになりました。



作品4

Finding the Richness

豊かさの発見

広島チーム …… エミリー（オーストラリア・ロックハンプトン）／ダニエル・C（ニュージーランド・アップーハット）／コースケ（大阪）／さわこ（東京）



[左から、コースケ、エミリー、さわこ、ダニエル]



古衣着物で傘を作っている職人さん。故人への想いが生き続けるようにとの願いが込められています。



庄原で出会ったおばちゃんは、とても陽気でかわいらしい方でした。おばちゃんと一緒にいると、元気になります。

広島平和記念公園では、被爆して亡くなった人びとへ子どもたちが祈りをささげていました。人びとは、決して原爆の恐ろしさを忘れてはいけません。



庄原市にある保育園で、子どもたちが遊んでいました。庄原市は山々に囲まれています。



広島市では、8月6日の平和記念公園を撮影しました。庄原市では、ホームステイ先で家族のようにあたたかく迎えてもらったり、職人さんから伝統技術と新しいテクノロジーが共存している様子を見せてもらったりしました。尾道市では、地図に載っていないような路地に入り、人びとの生活を撮影しました。この旅で出会った人びと、自然、伝統から、本当の豊かさとは何かを学びました。それはただ単にお金があるとか裕福だとかいうのではなく、人びとのあたたかさ、自然の恵み、過去と現在の共鳴といった、さまざまな豊かさでした。

広島チームに同行して

カメラを持っていることで、見知らぬ人に話しかける勇気が生まれ、笑顔が交わすことができました。そんな経験を重ねる度に、広島チームの4人は気持ちがどんどん軽くなって、たくさんの人びととの出会いを心から楽しめるようになっていきました。写真の技術ではなく、撮影者自身の人柄、さわやかな笑顔、相手を緊張させない雰囲気などが、人物を撮る時には大切なのだと4人を見て感じました。

一人が一日に撮影する写真の枚数は200～250枚です。この膨大な数の写真を一枚一枚見て良い写真を選ぶ作業が、写真の力を短期間に向上させました。撮影した写真をすぐに見て意見を交わすことができるデジタルカメラは、物を見る目を養うのに最適な道具だと思います。この深い学びの体験は、さまざまな教育の現場で力を発揮するに違いないと実感しました。

[藤掛敏也、TJF]

撮影を通じて得た、多くの人のやさしさに感謝！

「辺り一面真っ黒に焼け焦げて、川は被爆した人びとであふれかえていた」「頭が激しく痛みだしたので病院に行く」と、頭皮からガラス片がたくさん出てきた」など、8月6日の平和記念公園で被爆体験者から衝撃的な話をうかがいました。4人にとって最も印象的だったのは、話をしてくれたおじいさんやおばあさんの表情がとても穏やかで、最後にやさしい笑顔を見せてくれたことだったそうです。最終的にテーマに選んだ「豊かさ」とは、この旅で出会った多くの人から、彼らが受け取った「やさしさ」だったのではないのでしょうか。たくさんの人から親切にもらったこ

とに対する喜びと感謝が、作品に強く表現されているように感じます。撮影は順調でした。写真選びに想像以上に時間がかかり、作品のテーマや構成を考えはじめたのは、東京へ帰る新幹線のなかになってしまいました。時間的な制約もあり、深い議論に入る前に、作品を仕上げた感じがします。4人それぞれが自分の意見を十分に押し切ったかどうか、もっと自分らしいことばで発表できたのではないかなど、課題が多く残りました。しかし、5日間の撮影中は、体力的にも精神的にもとても大変だったにもかかわらず、誰一人ひと言も弱音を吐くことなく、常にタフに行動し精神的に撮影を続けたのは、本当に立派でした。



課題とこれからの展望

高校生たちが制作した四つの地域を紹介する作品は、TJFのウェブサイトにて4カ国語(日本語・英語・中国語・韓国語)で掲載しています(<http://www.tjf.or.jp/focusonjapan/jp/work/index.html>)。ウェブサイトには作品だけでなく、「撮影と交流の記録」コーナーには、高校生たちの9日間の活動の様子を、また「参加者」コーナーには、各参加者の感想や作品に含まれなかった写真も掲載しています。この事業に国内外から参加した高校生は16名と人数が限られたため、ウェブサイトにこのような資料を掲載することで、事業の全容を内外の多くの高校生たちにも見てもらえるように工夫しました。

「高校生のフォトメッセージコンテスト」の開催では課題として残したり、実現できずにいたりした点も、この事業では一歩進めることができました。一つは、世界の高校生が実際に会い交流する機会を設けたことであり、もう一つはコンテストという形式を取らず、各人の作品を競わせることなく、共同で作品を制作する過程で高校生にさまざまなことを得たり、感じたり、学んだりしてほしいということでした。

その一方でいくつかの課題も明らかになりました。たとえば、参加者の選考にあたり、事業の趣旨を十分に理解した高校生を選考するためにはどうすればよいか、高校生が自主的に自分たちの力で制作する作品に、顧問やスタッフがどのようどの程度アドバイスをすればよいか、写真部で活動している高校生とそうでない高校生の撮影経験の違いにどう対応すればよいかなど、さらに検討や改善が必要です。

今後は、2007年度に新たにオープンしたウェブサイト「つながる」も活用し、引き続き世界の若者の対話と交流を進め、高校生の活動の成果を発信することができるよう努めていきたいと思ひます。



「Focus on Japan 2007」ウェブサイト

参加者のレポートから

★抜粋。海外の参加者の感想はTJFが翻訳しました。

私は外国が大好きで、オーストラリアやアメリカに写真を撮りに行って、日本には関心がありませんでした。でも、今回宮城県を訪れて日本に興味をもちました。たとえ1時間しか交流できなくてもまた会いたいと思うような仲になり、つながりができたのは、やはりことばが通じる母国だからだと思います。外国をまわる前に日本各地をまわりたい、と思うようになりました。【ありす、宮城チーム】

最も印象的で考えさせられたのは、広島市から山に囲まれた庄原という小さな町を訪ねた時のことです。この町はとても魅力的で親切な人びとが多くて、本当の日本はこういうところなのだと感じました。広島市は信じられないほど穏やかでした。あれほど破壊された歴史があるのですから、人びとはもっと憤ったり動揺したりしているのかと思いましたが、平和記念日の様子はまったく反対でした。原爆の被害者の方々は自分たちの経験を他の人に伝えようとしていました。【エミリー、広島チーム】



庄原はとても自然が豊かなところ。

大阪のイルミネーションや広告、特に神社の緑の美しさには、心を打たれました。一つの都市の中にそんな対照的なところや多様性があることに本当に驚きましたが、それが日本では普通のようなのです。でも景色よりも何よりも、大阪の人たち自身がすばらしくて、一緒にいて楽しかったです。イギリスでは日本人といえば禁欲的で感情を表さないという印象があるのですが、大阪の人たちを知って完全に間違っていたと思いました。【ポリー、大阪チーム】

このプログラムで、より広い世界へ向けて視野が開けた気がします。日本がこんなにもおもしろいところだと知ってしまった以上、今後ずっとニュージーランドに留まることなんてできません。【ダニエル、広島チーム】

参加するまでは、「同じ風景を撮ったら同じ写真にしかない」と思ひ込んでいました。実際には、同じ風景でも角度を変えるとまったく別の場所に見えたりすることに気づきました。写真は心を写すものだと思います。これからも自分の心を撮り続けたいと思ひています。

【しんじ、大阪チーム】

私とやびちゃんは写真部だから、バンバン撮ってた。だけど中国の二人は撮る枚数も少ないし、すぐに休憩したいとジュースを買って立ち止まっていた。そんな態度にイラッとしたときもあった。だけどその日の晩、二人の話を聞いてビックリした。これまで写真を撮ったことがなくて、

一人の被写体につき1枚撮れば良いと思っていたらしい。「明日からはいっぱい撮るよ。ごめんね」と言ってくれた。すぐに休憩したがったのも、日本の食文化、気候が合わなくてしんどかったからだと聞いて、イラッとした自分が恥ずかしくなった。自分の世界だけで物ごとを考えてはいけないな、とつくづく思い知らされた。もっともっと広い考え方ができるようにになりたい。[みどりんぐ、東京チーム]

作品づくりのプロセスは本当に疲れました。でも、それ以上に楽しかった。一番おもしろかったのは、写真選び。大量の写真から25枚を選ぶのは本当に大変な作業でした。みんなの意見が食い違うこともしばしば。同じ人物だけれど背景がちょっと違う写真をめぐって、私とみどりんぐ、シアチュンとやびちゃんの二組の意見が対立したことがありました。延々と激しく意見をたたかわせたものお互い折れなかったため、とうとう、このやりとりを全然知らないTJFのスタッフ数人に、客観的に写真を見てもらうことにしました。そして、私とみどりんぐの推す写真が選ばれたのです！うれしくて拍手しちゃいました。



作品に入れる写真選び。

[シアオユアン、東京チーム]

国籍を超えて人の感性、個性の違いを肌で感じ、作品を通じてお互いを評価し合うことで自分の視野が広がった。こんな素敵な経験は受験勉強では絶対学べないことだし、私という人間を磨いていくうえで大きな糧になったと思う。私はこの経験ができたことに誇りを持って、これからもいろんなことにチャレンジし、自分の視野を広げていきたいと思います。[ひろみ、大阪チーム]

広島チームのメンバーやたくさんの人と知り合い仲良くなれたことで、自分自身にも少し自信をもてたし、前向きにこれからの進路などを考えていこうと思うようになりました。僕はまだ将来の夢を見つけることができていませんが、今回の経験を生かし、積極的にいろいろなことに挑戦し、いつか見つける夢に向かってガンバっていききたいと思いました。

[コースケ、広島チーム]

この夏に得られたことは、決して日本のことだけではありません。私が今までどのように生きてきたのか、これからどのように生きていくのかを悟らせてくれました。チームのみんなと毎晩話し合ったおかげです。私がどれだけネガティブに生きてきて、人生について狭い視野しかもっていなかったのか、よく分かりました。韓国に帰ってきてからは、いつもポジティブで幸せな考え方で日々を過ごそうと努力しています。また、新しい人と会うことがどれだけ楽しいことなのかを知り、将来の人生設計に変化を与えてくれました。日本だけでなくいろいろな国のいろいろな人と友だちになり、その国について知ることは今の私にとって大きな夢です。そして日本に対してよくない考えを持っている人たちと、できるだけ多く会って私の考えを伝えたいと思います。

[キョンジュ、宮城チーム]

写真部顧問のコメント

初日の東京の出会いでは、高校生たちは皆、気負いと期待と不安と緊張と、人間が持っているあらゆる感情が入り混じていた様子でした。それぞれの個性と、被っている仮面の下の素顔が垣間見られ、この子たちは果たして大阪を写真で表現できるだろうか、上手につくろうとして表面的な作品になってしまうのではないかと内心心配していました。



名物「たこせん」づくりを撮影。

大阪での撮影初日から、大阪のおっちゃん、おばさんに声をかけて写真を撮らせてもらいました。デジタル一眼レフに初めて触れるカメラの初心者もいましたが、あらゆるものにカメラを向け、自分なりの「大阪」を発見しようとする情熱には頭が下がる思いでした。カメラを向けて必死で被写体と対話しようとする情熱、写真のアドバイスに聞き入る真剣なまなざし——そんなことを間近に見聞きできたのは、教師として幸せなひと時だと感じました。

人間の出会いや生き方など、それぞれがそれぞれの形で経験できるこの企画に参加できた高校生は、本当に幸せだと思います。

[花畑雅之、大阪市立工芸高校撮影研究部顧問]

作品発表会来場者の感想（一部抜粋）

■参加者にとって今回の企画はただの観光でなく、人と人との出会いの素晴らしさや、逆にコミュニケーションの難しさなど、さまざまなことを学べたのではないのでしょうか。普段生活しているだけでは分からない自分を見つけられたのではないかと思います。

■各チームの作品にはそれぞれ個性があり、写真の雰囲気や組み方にもそれぞれ特徴がうかがえて、仕上がりはとても良かったと思います。撮影場所の地域性みたいなものも表現されていました。

「Focus on Japan 2007」アドバイザーのコメント

作品を見てとても感動しました。日本に来て13年になりますが、これほど豊かな日本人の表情を見たことがないと思うくらいです。

この事業に参加した高校生たちが、これだけ豊かな日本人の表情を撮影できたこと、そして何より一緒に作品をつくる過程で国際的な交流ができたことは、大変素晴らしい経験であると思います。

世界から集まった高校生が共同で作品づくりに取り組んだわけですが、お互いに文化が違うのですから意見が一致しなくても当然で、まず交流して相手を知ることが大切です。それぞれ相手のことを知ることが第一歩です。今回の経験をそれぞれ自分の国に持ち帰って、ぜひこの9日間の経験を周りの友人たちに伝えてほしい。そして、これからは国際社会の一員として、自分の心のなかに多様な世界をもって豊かな人生を過ごせるように、この経験を生かしてほしいと思います。 [可越、映像プロデューサー、東京視点代表]